

## 国内経済情勢

### 概観

国際収支は、9月も引き続き大幅の黒字となった。信用状などからみて、ここ当分好調が続くものと思われる。9月の鉱工業生産は、3ヵ月ぶりに微増となったが、これには一両月の減産の反動とみられる面が大きく、生産の大勢は依然ゆるやかな減勢傾向にあるといえよう。一方商品市況も、鉄鋼、繊維を中心に低迷を続けている。これまで季節需要に対する期待が大きかっただけに、需給の実勢悪を改めて見直す空気が広まっている。これに加えて、採算の悪化、株価の著しい低落などもあり、設備計画の再修正など、企業の動きには慎重さが加わりつつある。

#### 国際収支の好調続く

9月の為替収支は、経常勘定で62百万ドル(前月44百万ドル)の黒字となった。輸出の好調に加えて、輸入も引き続き減少をみせている。短期資本収支は、大幅な赤字となったが、長期資本の受入れが集中したため、資本収支全体では8百万ドルの赤字にとどまった。以上の結果総合勘定では、72百万ドルの大幅黒字となった。

輸出は、為替でみると前年同月比+25%と引き続きかなりの好調を示している。鉄鋼、化学製品、毛織物が著しい伸びを示したほか、従来不振であった綿糸布も、インドネシア向け委託加工分もあり持ち直している。地域別には、欧州、米国

向けとも高水準を維持している。このような輸出の水準は、9月から10月へかけての信用状などからみても、なおここ当分続くものと思われる。

一方輸入は、季節的な事情もあり引き続き減勢をたどっているが、その幅は小さくなってきた。通関でみると、原材料は総じて落ち着いているが、石油は生産調整を映じて当月も減少した。一方食糧、機械は、引き続き高水準を維持している。輸入原材料在庫率は、くず鉄、石炭を除いては全般的にかなり低いが、在庫水準は生産の低下に見合って若干下っており、それが最近の輸入減少の一因となっている。輸入関連産業の減産テンポがかなり鈍っている点などからみて、輸入が引き続き減勢をたどる可能性は小さいといえよう。

#### 生産の大勢、引き続きゆるやかな減勢

9月の鉱工業生産(季節調整済み)は、0.7%の微増となった。これは自動車、家庭用電気器具など、7、8月減産の反動増があったこともかなり響いている。7～9月をならしてみると、生産水準は4～6月平均を若干下回っており、大勢としては依然ゆるやかな減勢傾向にあるものとみられる。品目別にみると、消費財関係や、自動車、農機具などの資本財が増加したが、生産財は減産となった。

8月の出荷は、一部輸向け大型機械の完工もあって+1.0%と3ヵ月ぶりに微増した。しかし水準としては、4～6月平均をやや下回っており、需要の漸減傾向がうかがわれる。このところ、メーカーの原材料在庫調整のテンポは鈍化しつつあるが、設備投資は一般機械の出荷その他か

らみて、引き続き減勢をたどっているものと思われる。機械受注(民需、船舶を除く)は前年を5割見当を下回る水準で、依然横ばいに推移している。消費は耐久財の一部に若干需要頭打ちの傾向もみられるが、大勢としては引き続き堅調である。

この間、8月のメーカー製品在庫は+3.2%とかなりの増加を示し、在庫率としても昨秋来の最高となった。これには、テレビなど一部耐久消費財の増勢が響きおり、鉄鋼、非鉄などの生産財はむしろ微減となった。もっとも製品滞貨は、最近では買上げその他の関係もあって販売業者に転嫁されており、鉄鋼などについてそれが目だつた。

#### 商品市況、総じて低迷

最近の商品市況は、鉄鋼、繊維を中心に低迷が続いている。鉄鋼は依然市中人気離散のまま商内も活気薄で、引き続きジリ安となっている。繊維も合繊、人絹糸など好調であるが、綿糸、毛糸は軟調が続いている。このほか非鉄、化学肥料、上質紙なども、総じて軟調を示している。季節需要の台頭などから小戻しをみせているものは、塩価など化学の一部、燃料、クラフト紙その他に限られている。

もっとも、期末の関係で換金投げなどがあり、市況の軟調がやや目だっている面も否定できない。しかし最近の商況低迷は、基本的には実需の不振とその見直しに根差すものであり、金融緩和の影響も今後考えられないではないが、一部にかなり悲観的な見方が広がっていることが注目される。

本行卸売物価(食料を除く)は、9月-0.1%と微落のあと、10月上旬は保合いとなった。しかしこれは、生糸などの値上がりによるものである。一方消費者物価(東京)は、9月は-0.4%と続落したが、10月には+1.7%と反騰した。騰落いずれも、野菜、果物など食料品の値動きが響いている。

#### 市中貸出かなりの増加

9月の財政資金は、外為、食管を中心に大幅払超(昨年は受超)となったため、金融市場はおおむね平穩に推移した。銀行券の平均発行高は、前年比+13.9%と引き続き増勢が鈍っている。

9月の全国銀行勘定をみると、実勢預金の著しい伸びが目だつた。他方貸出も、1,920億円と前年同月(1,701億円)に比べかなりの増加となった。貸出が前年を上回る増加となった背景には、増資の困難があることも見落せないが、資金需要そのものも、なおかなり強いようにみられる。消費に直結した食品カメラなど一部業種では、業容拡大に伴う資金需要もみられるが、総体としては後向きものの比重が高く、とくに企業間決済のための資金需要は依然強い。以上のような貸出内容の変化に伴い、都市銀行を中心に貸出金利の上昇が続いている。

このところ、市中貸出の増加につれて、企業に対する預金通貨の供給は増加ぎみとなっている。このように企業の流動性が徐々に回復に向うきざしも生まれつつあるが、決済資金の需要がなお強いいため、企業の資金繰りが依然苦しい状況にあることは否定できない。

株式市況は、続落歩調をたどり、昨秋来の最低値を示現している。9月期決算における業績悪化に加えて無理な増資の圧迫もあり、減配に踏み切る企業がふえていることが、株価続落の基調をなしている。このような動きにつれて、一部企業の設備投資態度はかなり慎重さを加えつつある。

以上のような情勢を背景として、本行では10月26日、公定歩合の1厘引下げを含む一連の措置を決定し、実施に移すこととなった。